

太田古窯跡群

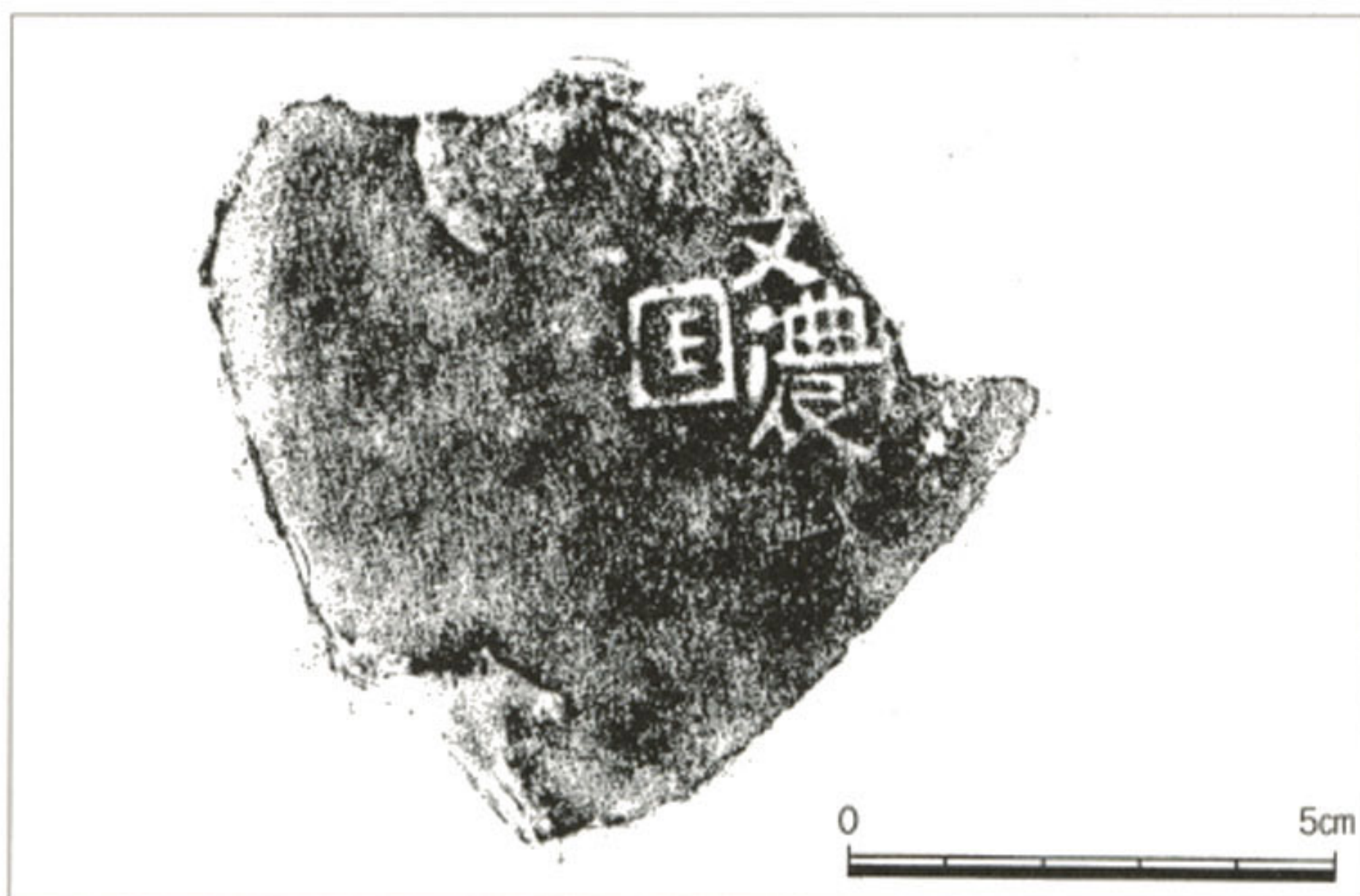
編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL (0583) 83-1123
平成12年3月1日



太田古窯跡群出土
美濃国刻印須恵器

上の写真は「須恵器」とよばれる古代の焼きもので、無台坏(小鉢のような小さな器)の底部のようです。須恵器には、一部欠損がみられますが「美濃国」と刻印が施されている様子がわかります。写真の美濃国刻印須恵器は、各務原市内須衛町字稲田にある、須恵器を生産した「太田1号古窯跡」の灰原(不良品の捨て場)より出土しました。こうした美濃国刻印須恵器は、各務原市内の古窯跡(須恵器生産遺跡)で確認されたものでは、これが初めてです。

わずか1点、しかも完全な器形を保ってはいませんが、この美濃地方で刻印須恵器が生産されていたことは間違いなく、当地の須恵器生産の研究に有力な資料がまたひとつ提供されました。



太田古窯跡出土刻印須恵器 拓本



老洞古窯跡出土 美濃国刻印須恵器・陶製印
岐阜市教育委員会 提供

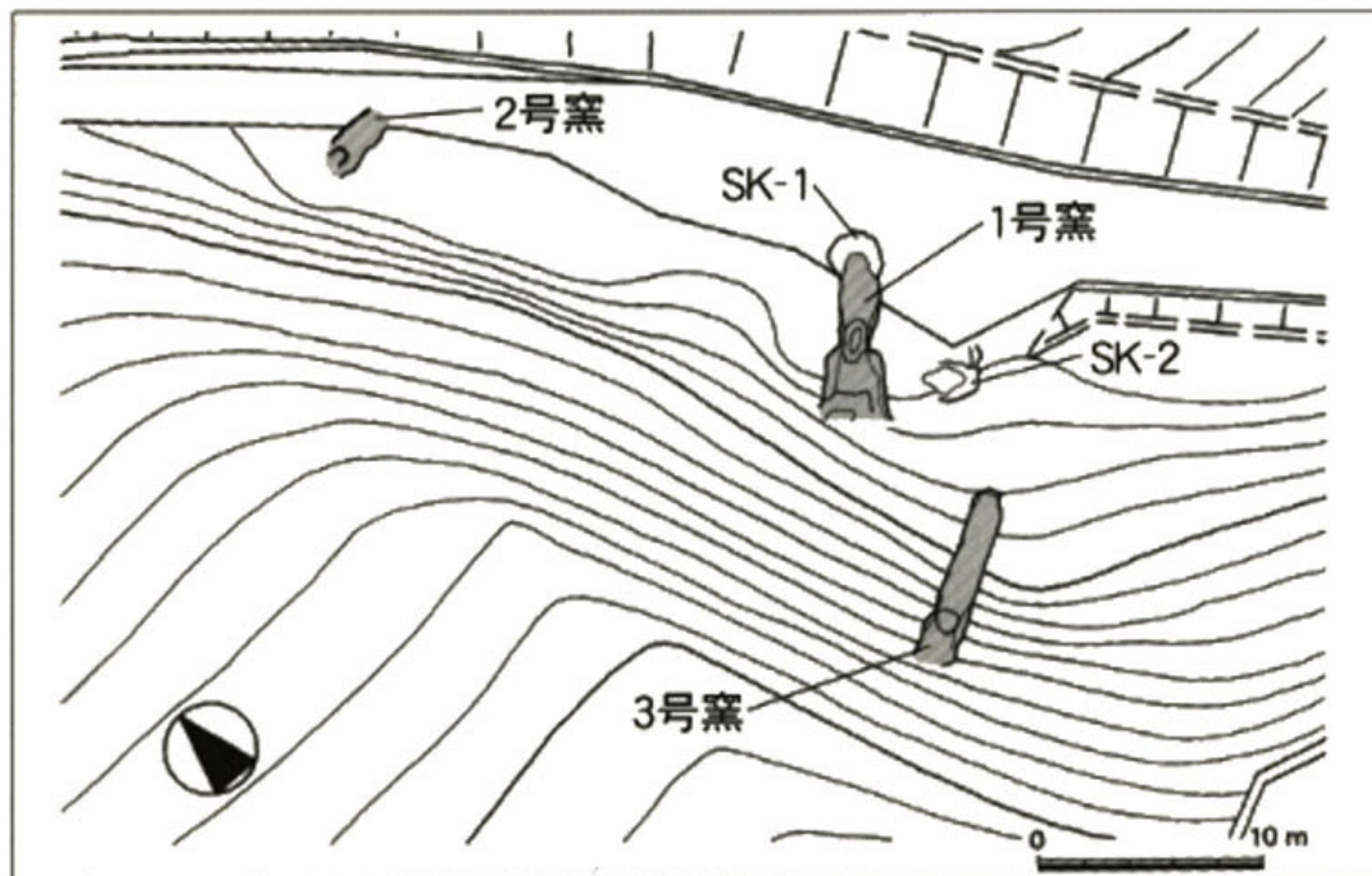
発見された刻印須恵器

それまで謎であった美濃国刻印須恵器の生産地が最初に発見されたのは昭和43年、太田古窯跡の北西、各務原市境に近い岐阜市芥見の「朝倉古窯跡」においてでした。そして昭和53年、朝倉古窯跡裏の山を隔てた「老洞古窯跡」の発掘調査からも、多くの美濃国刻印須恵器や陶製印が確認されました。

昭和53年の発見によって美濃国刻印須恵器の生産地はほぼ決定的となり、にわかに老洞や朝倉、太田古窯跡を含む「美濃須衛古窯跡群」が注目を浴びました。その後美濃国刻印須恵器は、窯跡の発掘調査からも発見されないままでしたが、平成4年、実に14年ぶりに太田古窯跡群から確認されました。

太田古窯跡群

太田古窯跡群とは、各務原市東北部から岐阜市、関市にまたがる美濃須衛古窯跡群のなかの一支群で、以前より稲田山北側の林道に沿って数基の窯跡が確認されてきました。平成4年に発掘調査が行われた窯は、北清掃センター北側の拡張工事の際に発見された3基の窯跡、および窯跡の一部と思われる2つの遺構(SK-1.2)が対象となりました。発掘調査の総面積は約1200m²です。



太田古窯跡群 発掘区全体図

調査された窯跡は、いずれも地下式の窯で、山の斜面を掘りこんだ構造をもっています。こうした窯内で焼かれるのが須恵器の特徴です。



1号窯 完掘状況(南より)

1号窯

発掘調査前から確認されていた窯跡の直下より確認されました。直上の窯跡に上部を削られていたため、正確な大きさはわかりませんでしたが、^{ぜんていぶ} 燃烧室の先端から前庭部まで約6mありました。

不良品を廃棄した灰原からは、^{つき} 坏、^{ちようけいへい} 長頸瓶、^{かめ} 甕など1500点以上の須恵器がみつかりました。出土した遺物から推定すると、8世紀前半(奈良時代初期)に操業していた窯であると考えられます。



2号窯 窯体遺物出土状況

2号窯

発掘調査時に発見された窯です。1号墳同様上部と下半部を削られていましたが、窯内からは700点以上もの生焼けの須恵器が確認されました。なかからは一対の状態^{ふた}で出土した坏と蓋も確認されました。(写真参照)通常重ねて焼成される須恵器ですがこの2号窯の焼成方法もその一つといえるでしょう。遺物から推定して、1号窯のやや後、およそ8世紀の中葉に操業していたと考えられます。

3号窯

2号窯と同様、発掘調査時に発見されました。一部が削られていたものの、窯の状態は良く残っていました。窯体全長は約7.6m、しかしその手前の灰原は削平されていたので3号窯にともなう出土遺物は少ないです。窯体内からは坏・鉢類^{はち}などにまじって、手づくね^{とうま}の陶馬や瓦塔^{がとう}などの製品も確認されました。出土遺物より、2号窯と同じく8世紀中葉の窯と思われます。



3号窯 完掘状況(南より)

須恵器と8世紀の社会



太田古窯跡群出土 須恵器

須恵器とは、それまで日本でつくられていた弥生土器や土師器とはまったく別の新しい土器の名称です。5世紀ころに朝鮮半島より伝わったといわれ、一般に青みがかった灰色をしています。須恵器は従来土器に比べて大変固く丈夫で、水をためておいても、しっかり焼けていれば漏れることはありません。高級品だった須恵器も、8世紀には実用的な器として広く普及し始めました。ただし食物の調理など、火を扱う場合には、従来通り土師器が引き続き使用されました。

太田古窯跡群の須恵器もこうした時代のもので、各務原市内の窯跡も8世紀には、飛躍的に増加したようです。また生産の増加とともに、器種には様々なバリエーションも生まれていきました。

左写真の向かって左側の細長い頸をもった器（長頸瓶）は、須恵器の中でも新しい器種で、須恵器が伝わった当時にはみられなかったものです。また写真中央の高台を持つ器（有台坏）も、美濃須衛古窯跡群では7世紀後半～8世紀初頭に登場する器種で、それまであった高台のない坏（無台坏）と並行して生産が続けられていきました。

太田古窯跡群から出土した大量の須恵器のなかに、王冠のような丸い焼きものがありました。

（写真下）これは当時の硯で、墨をすって字を書くための道具です。国家による官僚制度が整備された8世紀の奈良時代には、文書等が急激に増加し、役人を中心に文字を書く習慣が日本中に普及しました。硯、刀子などは当時の役人の必需品として広く定着し、また装飾を施した美しい製品も登場しました。



太田古窯跡群出土 円面硯

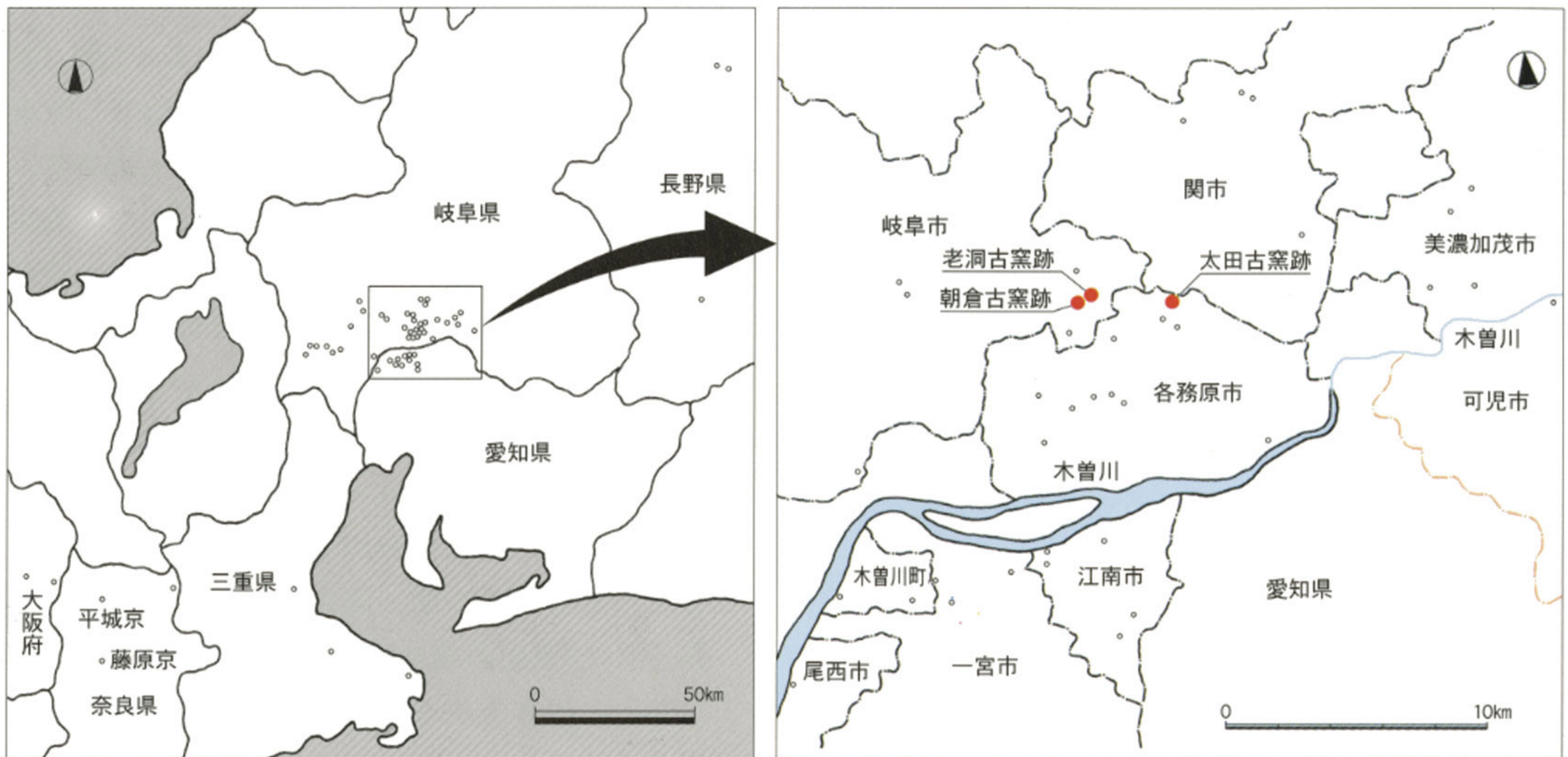
美濃国刻印須恵器の足跡を求めて

太田古窯跡以前にも、美濃国刻印須恵器は各所で発見されています。各務原市内では三井遺跡、前洞遺跡、村雨町遺跡などの集落跡から美濃国刻印須恵器が確認されています。しかしいずれも数は少なく、その生産に政治的力が関わったことは想像できますが、美濃国刻印須恵器を何のために生産し、どのように使用されたのかはまだよくわかっていません。また美濃国刻印須恵器の出土地の分布をみると、濃尾平野北部、各務原を中心に木曾川中流域に集中しているようです。



三井遺跡出土 美濃国刻印須恵器

この刻印須恵器の広がりには、一体何を意味するのでしょうか。



美濃国刻印須恵器出土地分布地図

美濃国刻印須恵器は、消費地に限定すれば、東海地方を越えて遠く大阪や奈良、三重などでも出土例が報告されています。現在のところ、岐阜市と各務原市以外に古窯跡からの出土例が特定できないので、美濃で生産された刻印須恵器が、普通

の須恵器製品とともに東海地方及び畿内まで流通していた可能性は、非常に高いといえるでしょう。

ひょっとしたら奈良時代の岐阜市や各務原市は、奈良の都と直結した先進的な工業地帯だったのかもしれません。

まとめ 須恵器生産の歴史的背景

美濃須衛古窯跡群は、各務原市を中心に岐阜市、関市などの山地に広がる、かつての一大窯業地帯です。現在、7世紀から中世までの操業が確認されていますが、なかでも須恵器生産窯が最も多く確認されており、多くは8～9世紀のもので

太田古窯跡もその操業年代は、8世紀の前葉～中葉と考えられ、美濃国刻印須恵器が焼かれたのも、またそうした時代であると推定されます。



美濃須衛古窯跡群のひとつ 天狗谷7号窯

8世紀の日本は奈良時代、律令制度が広く日本を支配した時代でした。主要な街道が本格的に整備され、官衙などの役所や国分寺、国分尼寺が建造されると、中央からの役人も多くやってきました。租税、兵役など地方の人々の生活までもが、中央政府の支配を受ける時代がきたのです。

こうした時代背景のもとで、太田古窯跡群をはじめとした美濃須衛古窯跡群では、須恵器生産が行われていたと考えられます。

後の平安時代に著された「延喜式」という書物には、美濃の国が中央へ陶器を献上していた記録が残っており、当地が平安時代以前から焼きものの特産地だったことがわかります。しかも献上品の生産地として、政府の援助や保護を受けていた可能性もあります。

今後さらに美濃須衛古窯跡群の発掘調査が進めば、美濃の地で刻印須恵器が生産された目的やしくみがわかる日も近いことでしょう。